

研究分野のキーワード：精神分析，フロイト，こころの闇，無意識，こころの平和

研究紹介

私たちは私たちのこころの主人なのでしょうか？——これが精神分析の創始者フロイトが私たちに投げかけたテーゼです。考えてみましょう。私たちが普段私たちの考えや行動を意識的に司りコントロールしながら生きているのは、一見当たり前のことのように思われます。私たちは毎日目覚めてから、自覚的に日々の生活を営み、家族や友人と会話を交わし、学校や社会生活を送っているようです。しかし、フロイトはそこに鋭く疑問を呈したのです。それは、フロイトの時代にたびたび見られたヒステリーというこころの病の患者さんを通してでした。すなわち、ヒステリーの患者さんたちは、自らもあずかり知らぬこころの闇の記憶に操られ、歩けなくなったり、立てなくなったり、理不尽な身体の痛みに悩まされたりしていたのです。フロイトは、それらの患者さんのこころにメスを入れ、こころの闇に光をもたらしました。その結果現れてきたのは、患者さんたちの性愛にまつわる悲痛な記憶や辛い体験でした。ヒステリーの患者さんたちの症状の背後には、明るみに出されないまま吊われずにいた愛憎のドラマが眠っていたのです。

このように私たちのこころには、主人である私たちを欺き、身を隠している無意識の部分が存在します。そこには私たちの意識には受け入れがたい、さまざまな情動が潜んでいます。端的な例をあげましょう。現代のヒステリーと言ってもよい解離性障害、すなわち多重人格障害の患者さんたちです。彼らは、普段の自分（主人格）とはまったく性質の異なった副人格を解離させ、人格交代というやり方で副人格を登場させるのです。副人格は普段のまじめで優等生である主人格とはまったく別人あり、たいていはとても子どもっぽかったり、怒りっぽかったり、甘えん坊だったりします。しかも、普段の自分は副人格の存在を知りません（無意識下に置かれています）。すなわち、多重人格障害の患者さんたちは、それら副人格で示される自己の一部を人格全体の中に受け入れられず、こころの中で離れ小島のように本土から隔離してしまっているのです。

私たちが、無意識に動かされているのは、何もこのような患者さんたちばかりではありません。現代に生きる私たちは、物質文明の豊かさの陰で、人間関係にまつわる愛と憎しみの情動の処理が不得手になってきているようです。したがって、対人関係からひきこもったり、突然キレて怒りをあらわにしたり、恋心をあきらめきれずにストーカーに堕してしまったり、落ち着く年代の中年期に至ってうつ病（気分障害）に罹ったり、理性ではコントロールしきれない理不尽な行動・態度に振りまわされたりしています。

精神分析は、このようなこころの闇に光を照らし、解明しようとしています。私たちは私たちの行動や態度の背後に、それによって突き動かされているこころの闇（無意識）が存在しているのです。みなさん、一緒にこころの奥地への探究をしていこうではありませんか。それが私たちの社会の平和にも繋がることにもなりましょう。